

英語のデモニム (地名から派生の人名詞)

—その多様性と規則性—

An Exploration of the Forms of English Demonyms

— On their Varieties and Regularities —

大 高 博 美

Abstract

The word “demonym” was coined by Paul Dickson in his book titled *Labels for Locals* (1997) not so long ago, thus it may not have appeared in the mainstream dictionaries yet. The term originates from the Greek word *demos* for ‘people’ with the suffix *-onym* for ‘name,’ indicating a name for a resident of a locality. While many demonyms are derived from placenames (e.g. Japan / *Japanese*, Italy / *Italian*, Mexico / *Mexican*, Iraq / *Iraqi*, new Zealand / *New Zealander*, Briton / *British*, Israel / *Israelite*, etc.), many countries are named for their inhabitants (e.g. Thailand / *Thai*, Finland / *Finn*, Denmark / *Dane*, France / *Frank*, *French*, Slovakia / *Slovak*, Germany / *German*, Slovenia / *Slovene*, etc.). Moreover, there is another type of demonyms based on the nickname of a people of a locality such as *Aussie* for Australia and *Kiwi* for New Zealand. What we should note here is the abundance of ways to create demonyms in English. On the contrary, in Japanese for example, the suffixes for demonyms are very few; there are only two possible morphemes “-jin” (e.g. *Osakajin*, *Kantojin*) and “-ko” (e.g. *Tokyokko*, *Edokko*) meaning ‘people’ and ‘children’ respectively. What does this difference between the two languages come from?

The purpose of the present paper is twofold; one is to answer the question as to why there have been so many ways developed to create various forms of demonyms in English, and the other is to find as many rules as possible for choosing the most proper suffix from a variety of choices. For example, it has been found that the suffix “-i” has been adopted for the countries in Middle East and its vicinity (e.g. Iraq / *Iraqi*, Oman / *Omani*, Israel / *Israeli*, Qatar / *Qatari*), and that the suffixes “-ian” and “-ite” are likely to be preceded by the consonant /v/ when the country name ends with the high back vowel /u/ (e.g. Peru / *Peruvian*, Moscow / *Muscovite*), while they are likely to be preceded

by the consonant /g/ when the country name ends with the high front vowel /i/ (e.g. Norway / *Norwegian*). Having knowledge of these rules or linguistic regularities may help students of English learn English demonyms a great deal.

1. はじめに

英語にはデモニム(Demonym)という語があるのだが、英語の母語話者でもこの語を知っている人はそう多くないに違いない。この語は Paul Dickson というフリーランスライターが1997年に書いた *Labels for Locals* という本の中で使われ¹⁾、人々に徐々に知られるようになったのはそれ以降だからである。よって、未だにこの語を記載していない辞書も多い。その意味は「地名から派生した人名詞」のことで、ギリシャ語で「人々」を意味する“*demos*”と「名前」を意味する“*onym*”からの造語である。英語での例を挙げれば、*Chicagoan*, *New Yorker*, *Japanese*, *Egyptian*, *Iraqi*, *English* などがある。

ここで特筆すべきは、地名の後に付けられる「人」を表す形態素(接尾辞)の種類が多さである(語例中の下線部に注目)。さらに接尾辞の例を挙げれば(以下、左側が国名で右側がそのデモニム単数形)、Israel / *Israeli* (「民族としてのイスラエル人」), *Israeli* (現在イスラエルに住む人) ; Philippines / *Filipino*; Spain / *Spaniard*; Peru / *Peruvian*; Hispania / *Hispanic*; Cyprus / *Cypriot*; Damascus / *Damascene*; Sydney / *Sydneysider*; Toronto / *Torontonian* など枚挙にいとまがない。形態論的には、通常、地名の後に「人」を表す接尾辞(suffix)を接続する構造をもつが、France / *French*; Sweden / *Swede*; Germany / *German*; Greece / *Greek*; Switzerland / *Swiss*; Denmark / *Dane* のような例外も多い。また、Australia / *Aussie* や Indiana / *Hoosier* のようなニックネーム由来のものまで存在する。よって英語のデモニムは、語彙習得上、極めて厄介な

1) Paul Dickson (1997) によると、この語を最初に使ったのは George H. Scheetz (1988) で、その著書 *Names' Names: A Descriptive and Pervasive Onymicon* (Schütz Verlag) の中であつたという。

存在だと言えよう。一方、日本語の場合は、英語と比べると、その構造はいたって単純明快で、使われる形態素の数も限られている。「東京人」「大阪人」「江戸っ子」「浪速っ子」の例に見られるように、地名の後に「人」か「子」を付けるだけである。「民」という形態素もあるが、こちらは「東京都民」「大阪市民」のように使われ、地名に直接つながれることはない。

本稿の目的は二つある。まず一つは、英語において、デモニムを構成する形態素がなぜかくまで複雑・多様化しているのかの問いに答えることである。そしてもう一つは、英語学習者がデモニムを少しでも効率良く習得できるように、デモニム生成の際に適用される規則性を見つけることにある。使用される接尾辞は、数ある候補の中からどのように選択され、どのような音韻規則の下で地名に繋がれるのだろうか。日本語の場合、先の例(江戸っ子、浪速っ子)からも分かるとおおり、形態素「子」は必ず促音といっしょに地名に付随することが分かる²⁾。促音が地名と形態素をつなぐ糊のような働きをしているわけだが、このような複合語形成における音韻論的規則性は、英語のデモニムにも見られるのだろうか。もし見られるとすれば、どんな規則であろうか。もしこの規則性が一般化できれば、デモニムの教育に大いに役立つであろう。筆者の知る限り、過去の文献において、英語のデモニムを接尾辞の種類によって詳しく分類した研究はあっても、上述の二つの問いに少しでも答えようとしたものは皆無である。

2. 英語教育におけるデモニム教育の意義と内容

英語のデモニムは、たとえ知らなくても言葉を産出する際(話す・書く)にはさほど困ることがない。他の語(man, woman, people等)で言い換えが可能だからである(例: *Norwegian* → people living in Norway)。しかしデモニムを聞いた

2) この際の促音は、私見では、複合化現象で連体助詞「の」が促音便化したものと思われる。一方、「道産子」(どさんこ)において促音が使われないのは、「産」(さん)の「ん」が一種の撥音便として代替機能しているからであろう(桜の坊→サクランボ、田の圃→たんぼ)。ただしこれは借用語には起こらない(例: ロンドンっ子)。

り読んだりする場合はどうか。その知識がまったくないと、相手の言わんとすることを完全に理解することは難しくなるであろう。実際、英語によるニュース報道などでは毎日多くのデモニムが使用されているのである。

では、デモニムの学習（教育）は、規模的にどんなレベルの地域（大陸・国・都市）のものを対象とすべきであろうか。「英語圏で使われるものはすべて覚えよ」というのでは、対象語彙の数からいって、完全習得はおおよそ不可能に近いであろう。よって、結論としては、高度に国際化した現代社会にあっては、まず大陸と国を単位とするデモニムは地名とセットで覚え、特別な地方および都市の名を冠したデモニムにおいては、ウェールズ (*Welsh*)、スコットランド (*Scot/Scottish*)、ロンドン (*Londoner*)、パリ (*Parisian*)、モスクワ (*Muscovite*)、東京 (*Tokyoite*)、大阪 (*Osakan*) のようなニュース等で比較的耳目に介する頻度が高いものを学習すれば十分だろう（それでも実は十分大変なのだが）。

3. 構造から見た英語のデモニムの種類

英語のデモニムは、形態論的に見れば、構造上、次の5種に分類できる。

- ① 地名+接尾辞
- ② 民族名（例：Finland / *Finn*; Denmark / *Dane*; Thailand / *Thai*; Serbia / *Serb*）
- ③ 不規則形（例：Madagascar / *Malagasy*; Halifax / *Haligonian*）
- ④ 外国語からの借用語（例：Kosovo / *Kosovar* ←アルバニア語, Netherland, Holland / *Dutch*³⁾ ←古英語; Lyon / *Lyonnais* ←フラン

3) “Dutch”は古英語（ドイツ語に近い）で“people, nation”の意味だったが（ゆえにドイツ語でドイツは *Deutschland*）、16世紀の神聖ローマ帝国時代に、現在のオランダ、ドイツの方面から来た人々を指すようになった。一方、神聖ローマ帝国内でこの地はアルプスから北西に広がる「平地」を意味する Netherlands (Nether = low-lying) で呼ばれていたが、オランダ北部は森林が多く Holland (古英語で Woodland の意) とも呼ばれた。その後、この語がオランダ全体を指す言葉となるに至り、結果、オランダは現在3通りの呼び名をもっている。

ス語; Cyprus / *Cypriot* ←ギリシャ語; Botswana / *Batswana* (単数), *Motswana* (複数) ←ツワナ語)

- ⑤ ニックネーム (例: Connecticut / *Nutmegger*; Australia / *Aussie*; New Zealand / *Kiwi*)

上の分類で③～⑤のタイプに分類されたものは、デモニム習得を困難なものにする元凶となっていると言えるが、幸い、使用頻度上ではマイナーなものばかりである。2番目のタイプの民族名からなるデモニムも数がさほど多くはなく、上で挙げた例以外には、主なものとして以下のようなものがあるだけである。

例: Czech Republic / *Czech*; Germany / *German*; France / *French*; Greece / *Greek*; Slovakia / *Slovak*; Switzerland / *Swiss* など

ついでながら、形態素が“-land”で終わる国名の場合(例: New Zealand, Iceland, Greenland)、そのデモニムには通常、接尾辞“-er”が選ばれるのだが(例: *New Zealander*, *Icelander*, *Greenlander*)、民族名に“-land”が付いた形の国名をもつ場合はその限りではない。

例: Poland / *Pole*, *Polish*; Scotland / *Scot*, *Scottish*; England⁴⁾ / *English*; Finland / *Finn*, *Finnish*; Ireland / *Irish* など

つまり民族名が英語の語彙中にすでに存在する場合、それが優先されてデモニムとなるのである。

これまでの考察から分かったことは、要するに、英語のデモニムの多くは①のタ

4) England とは、元々は「Angle 族の土地」の意で、Angles はそのデモニムでもある。アングル族は、5世紀頃ユトランド半島(今のデンマーク)の付け根の部分(その地形はかぎ型であったために angle と呼ばれる)に住んでいたが、その後ブリテン島に移住した。

イブの構造（地名+接尾辞）をもつということである。よって本稿の以下では、このタイプのデモニムの構造に焦点を当て、そこに潜在する規則性を考察することにする。

4. 英語のデモニムにおける接尾辞の種類と出自

前節のタイプ①のデモニムによく使われる接尾辞は、“-an” (Mexico / *Mexican*), “-er” (Stockholm / *Stockholmer*), “-ése” (Berma / *Bermese*), “-ian” (Norway / *Norwegian*), “-éan” (Europe / *European*), “-nian” (Panama / *Panamanian*), “-i” (Yemen / *Yemeni*), “-ish” (Ireland / *Irish*) で、大陸名 (12種⁵⁾) と国名 (195種) をベースとする全デモニムの実に 94 パーセントを占める。尚、上に挙げた接尾辞 6 種は、古英語 (OE) 由来の “-ish” を除けば⁶⁾、すべてラテン語由来のものである⁷⁾。

英語の大陸名は「中東」(Middle East) と「ヨーロッパ」(Europe) を除けば、すべて母音 “-a” で終わっており、これよりデモニムを派生させるには語の最後に “-n” を付けるだけでよい (脚注 5 を参照)。つまり接尾辞としては “-(a)n” が選ばれるわけである。この音法則は国・都市名とそれから派生するデモニムの関係においても同様に看取できる。

5) Africa/*African*, Antarctica/*Antarctican*, America/*American*, Asia/*Asian*, Australasia/*Australasian*, Australia/*Australian*, Eurasia/*Eurasian*, Europe/*European*, Oceania/*Oceanian*, Middle East/*Middle Eastern*, North America/*North American*, South America/*South American*.

6) ゆえに、英国内の地名を冠したデモニムにはこの接尾辞が使われたものが多い (例: *British*, *Scottish*, *Welsh*, *Irish*, など)。

7) 例えば “-i” は、ラテン語で “-us”, “-er” で終わる男性名詞・形容詞の単数属格もしくは複数主格・呼格を示す接尾辞である。また、接尾辞 “-an” は、歴史的にはラテン語の “-anus” に由来し、ラテン語から借用された名詞について形容詞を派生した (中島 2012)。尚、現代英語ではその派生した形容詞は文法的に名詞としても機能するようになっている (例: *American* = アメリカの / アメリカ人)。

例：Austria / Austrian; Cuba / Cuban; Costa Rica / Costa Rican;
Guatemala / Guatemalan; Jamaica / Jamaican; Sri Lanka / Sri Lankan;
Nebraska / Nebraskan; Ottawa / Ottawan など

この接尾辞 “-(a)n” は、上の例のように “-a” で終わる地名に付く他に、“-o” で終わる地名にも適用される(例：Chicago / Chicag^oan; El Paso / El Paso^oan)。ただし最後から二番目 (antepenultimate) の強勢音節が重音節 (CVV, CVC, VV) の場合、先行母音 “-o” は脱落してしまう傾向が強い(例：San Francisco / San Francisc^oan; San Diego / San Dieg^oan; Puerto Rico / Puerto Ric^oan)。特に語末母音が “-io” のときは必ずこの音変化が起こる(例：San António / San Antóni^oan)。これは、接尾辞 “-ian” が直前の強勢音節と共起関係にあるからである。しかしながら、語末母音 “-o” の脱落は、まれに語中の強勢音節の位置に関係なく、しかも語末から二番目の音節が軽音節の場合にも起こりうる(例：México / Méxic^oan, Morócco / Morócc^oan)⁸⁾。よって、接尾辞 “-(a)n” が付くときの地名語末母音 “o” の脱落を規則で完全に予測するのは困難と言える。

一方、上述の接尾辞 “-(a)n” と似て非なる接尾辞 “-ian”⁹⁾ は、地名が前方高舌母音 “-i” (二重母音 “-ei”, “-oi”, “-ai” も含む) か “-ia” で終わる場合に適用される。ただしこの場合、接尾辞 “-ian” 中の “-i” もしくは “-ia” は先行名詞の語末母音 “-i”, “-ia” と重複するので脱落する(例：Hanói / Hanóiⁱan; Cálgary / Calgáriⁱan; Brúnei もしくは Brunéi / Brunéiⁱan)。そして語中の強勢位置は常に “-ian” の

8) この二つの語例から、語末母音 “-o” の脱落は、語末から二番目の音節中の母音が単母音で強勢を帯びている場合にも (Morócco) そうでない場合にも (México) 起こることが分かる。

9) 4種の接尾辞 “-(a)n”, “-ian”, “-nian” は異形態 (allomorph) の関係にないと考えるのが妥当であろう。なぜなら “-ian” と “-nian” は語中で強勢位置を動かす力をもっている (つまり直前の音節に引き寄せる) が、“-(a)n” はそうではないからである。よって、これらの接尾辞の現れ方は、厳密に言えば相補分布の関係にはない (つまり異形態の関係にはない) のである。ただし歴史的に見れば、これらは異形態だった可能性は捨てきれない。地名が “-a” (Africa), “-ia” (India), “-nia” (Romania) で終わる場合には、例外なくそのデモニムの接尾辞は規則的にそれぞれ “-(a)n” (African), “-ian” (Indian), “-nian” (Romanian) となるからである。

直前である。この接尾辞は、さらに地名が歯茎音 (“-n”, “-t”, “-d”, “-s”, “-l”, “-r” : これらの子音の調音点が前方高舌母音 /i/ と舌尖の位地において近い点に注意) もしくは歯唇音 (“-v”) で終わっている場合にも適用される (下の例を参照)。ただし Rome などの単音節語では適用されない (→ **Romean*, *Roman*)。さらに、“-way” と綴られる二重母音 /-ei/ の後では子音 /g/ が挿入される場合がある (例 : *Norway* / *Norwegian*; *Galway* / *Galwegian*)。一方、San Jose (/sæn hæuzéi/) のように語末の /ei/ が強勢を帯びている地名の場合、/g/ 挿入は起こらない (*San Joséan*)。さらに、Peru や Oslo, Warsaw のように地名が後方高舌母音 /-u/ もしくは後方中舌母音 /-ɔ/ で終わっている場合は、子音 /v/ が挿入される場合もある (*Peruvian*, *Waterlóovian*, *Oslóvian*, *Warsóvian*) が、必ずしもこの変化が起こるというわけでもない (例 : *Naurú* / *Naurúan* / **Nauruvian*)。さらに、二重母音 /-au/ で終わっている場合も “v” 挿入は起こらない (例 : *Paláu* / *Paláuan* / **Paláuvian*)。

例 : “-i” : *Ítaly* / *Itálian*; *Háiti* / *Háitian*; *Máli* / *Málian*; *Miámi* / *Miámian*;
Hanói / *Hanóian*; *Chíle* / *Chílean*; *Brunéi* / *Brunéian*; *Páraguay*
 / *Paraguáyan*,

“-ia” : *Austrália* / *Austrálian*; *Bulgária* / *Bulgárian*; *Croátia* / *Croátian*;
Mongólia / *Mongólian*; *România* / *Románian*; *Rússia* / *Rússian*,

“-n” : *Irán* / *Iránian*; *Jórdan* / *Jordánian*; *Bóston* / *Bostónian*;
Édmonton / *Edmontónian*; *Wáshington* / *Washingtónian*,

“-t” : *Egypt* / *Egyptian*; *Ádelaide* / *Adeládian*,

“-s” : *Páris* / *Parísian*; *Láos* / *Láotian* (もしくは *Laótian*),

“-l” : *Brazíl* / *Brazílian*; *Bristol* / *Bristólian*; *Castile* / *Castílian*

“-r” : *Síngapore* / *Singapórean*; *Báltimore* / *Baltimórean*,

“-v” : *Máldive(s)* / *Maldóvian*

これらのうち地名が“-s”で終わっている場合は、注意が必要である。“-s”が複数マーカーの接尾辞と誤認されるせいか、この部分が基底にはないものとしてデモニムが派生される場合があるのである(例：*Áthens / Athénian*; *New Orléans / New Orléanian*; *Hondúras / Hondúran*; *Máldives / Maldívian*)。

さらにこの接尾辞は、*Cánada*, *Louisíana*, *Bahámas* のように、地名語が歯茎音もしくは鼻音に“-a”(/ə/)か“-as”(/əs/)が付いた形で終わるとき、語末の“-a(s)”を脱落させるという特徴がある(例：*Canáidian*; *Louisíanian*, *Bahámian*)。このとき強勢位置は必ず“-ian”の直前に置かれることになるため、派生前の地名語における強勢音節位置はこの脱落現象の生起に影響を与えない。尚、この現象は2音節語の地名のときは生じない(例：*Ghána / Ghanáian*)。

接尾辞“-éan”(/i:ən/)は、先の“-ian”(/i:ən/)と比べてスペルが異なるだけでなく、それ自体が必ず強勢を帯びる。よってこれらは互いに異質な関係にあるようにも思われるが、実際は異形態の関係にあると言えるだろう(中島2012)。この接尾辞は、地名が強勢のある“-éa”で終わるか(例：*Koréa / Koréan*; *Eritréa / Eritréan*)、もしくはスペルが“-e”で終わりがかつ先行音節が無強勢単母音である場合に適用されるからである(例：*Eúrope / Européan*¹⁰⁾)。つまり接尾辞“-éan”の出現は音構造から予測可能である(換言すれば“-ian”とは相補分布の関係にある)のである。一方、地名がスペル“-e”で終わっている場合であっても、先行音節が強勢母音や長母音(2モーラ母音)をもっているときは、スペル上は“-ean”となっても発音は/i:ən/となる(例：*Báltimore / Baltimórean*; *Chíle / Chilean*; *Zimbábwe / Zimbábwean*; *Síngapore / Singapórean*)。

次に、接尾辞“-nian”は、上の二種(“-an), -ian”)からは独立した形態素とみるべきであろう(脚注9を参照)。この接尾辞は、強勢はなくとも比較的音色の明瞭な母音で(通常長めに発音され、借用語に多い)終わっている場合に適用され

10) このデモニム派生は *Europe* の語源(歴史家ヘロドトスがギリシャ神話に出てくる女神エウロペの名をヨーロッパの地域名として初めて使用)にも理由がありそうである。つまり、元々 *Europe* という語は、綴りからも分かるとおり、子音 /p/ で終わるのではない。潜在語末母音 “e” の存在が接尾辞 “-ean” の選択につながるのであろう。

る傾向があるが(例: Pánama / *Panamánian*; Tobágo / *Tobagónian*; Torónto / *Torontónian*)、必ずしもそうであるというわけではない(例: Chicágo / *Chicágoan*, **Chicagonian*; México / *Méxican*, **Mexconian*)。つまり、“-an”と“-nian”は、語末母音の種類によって相補分布する関係にないのである。

最後にもうひとつ、上に挙げた接尾辞と比べれば使用頻度は少ないが、同じくラテン語由来の接尾辞として“-in(e)”も挙げておきたい(例: Montenégro / *Montenégrin*; Argentína / *Argentíne*¹¹⁾)。

5. 英語のデモニムで使われる接尾辞の地域性

英語のデモニムに見られる規則性は音に関するものばかりではない。デモニムに使われる接尾辞には、対象とする人々の住む場所の地理的位置や規模も関係しているのである。例えば“-ese”は、主に東・南アジアに位置する国名に付く接尾辞である(例: *Japanese*, *Chinese*, *Burmese*, *Taiwanese*, *Vietnamese*, *Timorese*, *Bhutanese*, *Nepalese* もしくは *Nepali*)。このように定義すると、ヨーロッパの *Portuguese*, *Viennese* やアフリカの *Senegalese*, *Sudanese*, *Congolese*, *Togolese*, *Beninese*, *Gabonese*, そして南アメリカの *Surinamese* などは非アジア圏にあるために例外となってしまうのだが、この事実はどのように説明しうるだろうか。この接尾辞を採る国が東・南アジア以外ではアフリカのフランス語を公用語とする国 (Francophone) に多い事実から判断すると (ただしアラビア語を公用語とするスーダンを除く)、フランス語の接尾辞“-aise” (元々はラテン語で出自を意味する“-ensis”と関係している) の発音が英語の“-ese”と似ているところにも理由があるのかもしれない¹²⁾。

接尾辞“-i”は、同じくラテン語に由来するが、主に中東地域に住む人々のデモニムに使われている(例: *Bahraini*, *Emirati*, *Israeli*, *Kuwaiti*, *Omani*, *Qatari*,

11) *Argentínean* のデモニムも存在する。

12) Wikipedia <http://en.wikipedia.org/wiki/Demonym>

Saudi, Yemeni, Iraqi.)。この地域は古代ローマ人にすでによく知られており、古来よりラテン語で書かれた書物の中で言及されることが多かったためであろう。唯一の例外は、同じ中東に位置する Lebanon が *Lebanese*¹³⁾ となって **Lebani* とはならない点だが、これは上述のフランス語からの影響で説明がつく。この国は 1918 年から 1941 年までフランスに統治された経歴をもつのである¹⁴⁾。尚、この接尾辞は中東に接するアフリカの一部 (*Djibouti, Sahrawi, Somali* もしくは *Somalian, Swazi(land)*) と西アジアの国々にも援用されている (例: *Afgani* もしくは *Afganistan; Azerbaijani; Bangladeshi, Bahraini; Bengali, Bihari; Kashmiri; Kyrgyzstani; Kazakhstani; Nepali* もしくは *Nepalese; Pakistani*¹⁵⁾; *Punjab; Turkmenistani; Tajikistani; Uzbekistani*.)。

次に、接尾辞の “-ite” は都市部に暮らす人々を意味し、国名と一しょには決して使われることがない (例: *Tokyoite, Ann Arborite, Dallasite, Denverite, Perthite, Seoulite, Vancouverite, Wisconsinite, Wyomingite*)。唯一例外として “*Israelite*” (イスラエル人) が挙げられるが、この国が元より都市国家的な存在だったことを思えば納得できる。ちなみに、国名が後方高舌母音 /u/ を示す綴り “-u” で終わっている場合は、接尾辞 “-ian” のときと同様に (Peru / *Peruvian*)、子音 “-v-” が挿入される (Moscow / *Muscovite*)。

- 13) Lebanon から **Lebanonese* ではなく *Lebanese* が派生するのは、最後の音節 /non/ が頭子音と尾子音に同じ鼻音 /n/ をもっていて必異原理に反するからで、音変化における一種の脱落現象が起こっていると考えられる。ちなみに、英語の February や Probably においてそれぞれ語中最初の子音 /r/ と /b/ が発話において脱落することが多いのも必異原理によるものである。この原理はまた、早口言葉が難しい理由も説明してくれる。
- 14) フランス語圏とは関係のない米国の Pennsylvania 州にある Lebanon 市のデモニムは、当然、**Lebanese* ではない。 *Lebanonian* である。
- 15) 西アジアにはペルシャ語で「国」を意味する接尾辞 “-stan” で終わる国名が多い。この接尾辞に先行する形態素が民族名であるとき、これがデモニムとなる (Afganistan / *Afgan, Kirgyzstan / Kyrgyz, Kazakhstan / Kazakh, Turkenistan / Turkmen*)。ただし Pakistan のデモニムは常に *Pakistani* である。これはパキスタンという国名が四つの地域 (*Punjab, Afghania, Kashmir, Sindh*) の頭文字を採って作られた頭語 (Acronym) だからである (最後の S は “-stan” の S と掛けてあり、また母音 “I” は全体を発音しやすくするための「挿入音」であるが、象徴的に Indus 川を表すとも言われている)。

6. 形容詞から派生した英語のデモニム

デモニムに使われる接尾辞のうち“-ish”と“-ese”は、元々は形容詞を派生するためのものであった。よってこれらの接尾辞で終わるデモニム形は、実際に今でも形容詞（限定用法・叙述用法）として使われ¹⁶⁾、人名詞としては通常、集合名詞扱いを受けるか（例：The English）、単複同形である（例：Three Chinese）。結果、“-ish”の接尾辞をもつデモニムは別のデモニムと併存する率が高く（下の例参照）、一方“-ese”をもつデモニムは形容詞用法の表現にとって代わられやすい（特に人数が複数の場合：例 They are five Chinese people in the room.）。

例：Britain / *British*¹⁷⁾, *Briton*; Denmark / *Danish*, *Dane*; England / *English*, *Englishman*; Ireland / *Irish*, *Irishman*; Poland / *Polish*, *Pole*; Scotland / *Scottish*, *Scot*; Spain / *Spanish*, *Spaniard*; Sweden / *Swedish*, *Swede*）。

ところで、英語の語彙にはラテン語を基盤とする形容詞から派生した地名がある。例えば、Argentina（「銀の」←ラテン語）、Brazil（「赤い」←ポルトガル語）、Philippines（「Phillip 2世の」←スペイン語）などである。ちなみにフランス語では地名とデモニムは文法的に同形である（例：Lyonnais「リヨン地域」および「リヨン人」の二つの意）。このような形容詞が語源となっている国名は、英語に借用されてからもデモニムとして使われていてもよさそうだが、英語にはフランス語

16) 例：Japanese cars, British isles, The design is Scottish. しかし一方、アメリカやカナダの州や都市レベルのデモニム形は一部の例外を除けば（例えば Hawaiian dance / *Hawaii dance, Alaskan oil / *Alaska oil, Albertan oil sand / *Alberta oil sand, Texan cattle/*Texas cattle）、形容詞として使われることがない（例：Manitoba maple / *Manitoban maple, Chicago police / *Chicagoan police）。

17) 現代では、*British* は U.K. に国籍をもつ人に、そして *Briton* は民族的なニュアンスを帯びた表現となっている。この点はフランスにおける *Frank* / *French* も同じで、前者は民族を意識した時に使われるデモニムである。

のような用法がないので、実際には国名となった元形容詞形から新たに人名詞が派生している(例：Argentina → *Argentine*, *Argentinean*; Brazil → *Brazilian*; Philippines → *Filipino*)。

7. 英語のデモニムにおける接尾辞とストレス

ここでは形態音韻論の観点から、これまで述べてきた接尾辞をストレスとの関連で考察する。よく知られているように、英語の形態素は、語内にあってストレスの位置を決定する力をもつものともたないものに分類できる。例えばデモニムの接尾辞同様に「人」を表す“-ee”や“-eer”はその音節自体がストレスを帯びる(タイプA：例 *examinée*, *attendée*, *employée*, *volontéer*, *ingénieur*, *pionéer*)。一方、“-ling”, “-er”, “-or”, “-i”¹⁸⁾などはストレス位置の決定には関与しない(タイプB：例 *spiderling*, *sibling*, *intépreter*, *encóunter*, *nóminator*, *operator*, *bassi*)。また、接尾辞“-tion”, “-ia”, “-ic”, “-al”, “-logy”, “-ity”などは、それ自体にはストレスをもつ力はないが、直前の音節にストレスを引き寄せる力をもっている(タイプC：例 *initiátion*, *Bohémia*, *Antárctic*, *inícial*, *biólogy*, *longébity*)。

この見地から英語のデモニムに使われる接尾辞を分類すると、上のタイプAに当て嵌まるものに“-ése”, “-éan”、タイプCに当て嵌まるものに“-ian”, “-nian”が挙げられる。これら以外はすべてタイプBに属し(例：“-an”, “-i”, “-ish”)、ストレス位置の決定に関与することがない。

8. 最後に

結論として、冒頭で提起した「英語のデモニムは語彙的になぜかくも多種・多様化しているのか」の問いには、次のとおり答えられるであろう。

まず、「英語では形容詞と名詞が同形でもよい」という文法が要因の一つとして

18) イタリア語起源の複数マーカー

挙げられよう（例：black=「黒い」「黒」、white=「白い」「白」）。だからこそ、当初は形容詞の接尾辞として使われていた“-ish”と“-ese”が名詞としてのデモニムにも援用されるようになったわけである。次に、接尾辞の種類が多い理由として、英語の語彙が系統的にゲルマン系のみならずラテン系言語（フランス語）をも基盤としている点が挙げられる。そして更にもうひとつ理由を挙げるとすれば、英国が多言語社会ヨーロッパに位置するという地理的な状況である。英国人は昔から様々な言語に触れる機会が多かったからこそ、彼らによってデモニムが造語される際に現地の表現がそのまま採用されるということも起こりえたのである。

上で述べた英語のデモニムにおける多様性の理由解明の他に、そこに規則性を見つけ出すことも本稿の意図した目的の一つであった。規則性は、デモニム形態素の適用される語の地域性（例えば位置が「中東」か「アジア」か「ヨーロッパ」かなど）や出自（「ゲルマン語系統」のものか「ラテン語系統」のものか「外国語からの借用」かなど）、そしてその語のもつ音韻構造の三点から分析が可能であることが分かった。しかし、三番目の音韻構造上の規則性の解明に関しては、十分なされたとはいいがたい。例えば、“-(a)n”と“-ian”の選択・適用がどのように決定されるのかを十分説明しうる規則性は見つけることができなかった。例外の存在が立ちはだかったからである。結論として“- (a)n”と“-ian”が異形態の関係にないとしたのは、このような理由からである。とはいえ一方で、かなりの数の音韻規則を見つけたことも事実である。よって、数あるデモニム形態素のうちどれが選ばれどのように派生するかは、ある程度、適用される地域名のもつ音韻構造から予測可能であると言えるのである。

ところで筆者は、英語のデモニムにおける多種・多様性を見るとき、日本語における代名詞の豊富さを思い起こさずにはいられない。例えば二人称には「あなた」「あんた」「おまえ」「きみ」「おたく」「そちら様」などがある。相手の名前を知っているか失念していないときは、二人称に頼らなくてもよいが、いつもそうであるとは限らない。このようなとき、筆者はしばしばどの二人称をもって相手を遇するべきか迷うのである（例えば、道でハンカチを落とした人に話しかける場合など）。代

名詞「あなた」は常に最適な選択ではないからである。これなどは、まさに「豊かさの中の貧困」とでも呼べる現象なのだが、英語のデモニムにも当て嵌らないだろうか。選択できる接尾辞の数が多すぎて、地名によってはデモニムの派生が予想もつかないのである。結果、デモニムの習得は、英語を外国語として学ぶ者だけではなく母語話者にとってもやっかいな語彙となってしまうのである。英語話者が新しいデモニムを採用する際に、時として外国語をそのまま使ってしまうことがあるのも、案外、こんなところに理由があるのかもしれない。

選択肢の数が多いということは、一つの地名に対し異なるデモニムが併存する可能性が高いということである。使う人の好みの問題が関わってくるからである。これは、メディアで言及される頻度の少ない地方都市のデモニムほどそうである。例えば Connecticut 州に住む人は、*Webster's New International Dictionary* (1993) によれば、自分たちのデモニムとして *Connecticutian* を好むそうだが、実際には *Connecticuter* やニックネームの *Nutmegger* の方がよく使われているようである。Michigan 州のデモニム *Michiganiaan* と *Michigander* にも同様のことが言える。1979年の州議会では公的なデモニムとして前者の使用が決まったが、後者を使う者も依然かなり多いようである (Dickson 1998: 148)。理由は、後者のデモニムがかの有名なアメリカ第16代大統領エイブラハム・リンカーン (Abraham Lincoln: 1809-1865) によって1848年に造語されたものだからである¹⁹⁾。

19) リンカーンが Michigan のデモニムとして **Michigander* ではなく *Mihigander* としたのは言語学的に興味深い。筆者が想像するに、これは 'gander' (オスのガチョウ) と 'lander' の語呂合わせであろう。だとすると、リンカーンのユーモアが感じられる造語と言える。語末を (l-)ander としたかったのは、恐らくミシガン州のロウアー半島部 (Lower Peninsula of Michigan) が五大湖で取り囲まれている地理的特徴を強調するためであったと考えられる。尚、*Michigander* の語構造が 'Michi-' と '-gander' の2形態素から成ると捉えると、その女性形は *Michigoose* (単数) / *Michigeese* (複数) となるのだが、さすがにこれらは使用されていないようである。ついでにもう一つ文化関連でのデモニムの話題に言及すると、筆者は以前に興味深いブログを読んだことがある。それは、一人の英国人ブロガーが香港で従来使われていたデモニム *Hong Kong Chinese*, *Hong Kong people*, *Honkongese* が最近 *Honkonger* に取って替わられていることに対する違和感を表明する内容だった。その違和感がどこからくるのかといえば、本稿第5節で述べたように、接尾辞 '-ese' は東アジア地域のデモニムに多用されており、一方 '-er' は欧米の英語圏でのみ使われているという違いからである。もっ

ところで、「地球」のデモニムには候補として *Earthling*, *Earthman*, *Terran* などが挙げられるのだが、将来、どれが一番人気を博するのだろうか。ちなみに「火星人」は *Martian* である。

参考文献

- Bauer, L. (2003). *Introducing Linguistic Morphology*, 2nd ed. Washington, D. C.: Georgetown University Press.
- Scheetz H. G. (1988). *Names' Names: A Descriptive and Pervasive Onymicon*. Schütz Verlag. Haspelmath, M. and A. D. Sims (2010). *Understanding Morphology*, 2nd ed. London: Hodder Education.
- Lieber, R. (2010). *Introducing Morphology*, Cambridge: Cambridge University Press.
- 中島直嗣 (2012). 異形態の実態について—派生接辞 -an, -ian, -ean の形態音韻的分析—『21世紀英語研究の諸相』井上亜依・神崎高明編, 東京: 開拓社, 224-237.
- National Geographic Society (1990). "Genitiles, Demyonyms: What's in a Name? In *National Geographic Magazine* 177: 170.
- Safire, W. (1997). "On Language; Gifts of Gab for 1998". New York Times.
- Dickson, P. (1997/2006). *Labels for Locals: What to Call People From Abilene to Zimbabwe*, HarperCollins Publishers.
- Spencer, A. (1991). *Morphological Theory*, Oxford: Blackwell.
- Webster's New International Dictionary* (1993). Merriam Webster.
- Wikipedia <http://en.wikipedia.org/wiki/Demonym>

とえば、アジアにあって英語圏のイメージを醸成したい英語の話せる香港人とこの願望が理解できない欧米系英語話者間の齟齬に起因するのである。